

北京語の声調特徴から予測する北京語話者 におけるアクセント習得の問題点

潘 心瑩

要 旨

第二言語習得において、母語の影響が最も顕著に現れるのは音声習得である。母語に類似した要素は習得が容易で、母語と異なる要素は習得が困難であると考えられる。本研究は、母語がどのように日本語のアクセント習得に関与しているか解明するため、使用言語の特性を明らかにし、アクセント習得における問題点を考察した。その結果、北京語母語話者が日本語のアクセントを習得する際、以下のようなことが予測される。(1)音節にかかわらず、尾高型に対する習得が困難である。(2)2拍語の頭高型、3拍語と4拍語の平板型と中高型に対する習得はあまり問題ないことである。

キーワード

声調 アクセント習得 母語 高低変化 高低変動

1 はじめに

外国語教育においては、学習者の習得成果を上げるため、学習者の母語と目標言語を比較、対照してその特性などの異同を述べる対照研究や、学習者の誤用から言語上のさまざまな特徴を明らかにする誤用分析のような研究が常に行われている。また近年では対照研究や誤用分析を経た上で、さらに学習者の学習背景などを含めた学習のあり方についての中間言語研究も盛んに行われている。学習者の問題点をより詳しく把握するためにはこのような研究が必要不可欠である。

音声教育ではコミュニケーション能力を向上させるため、アクセントやイントネーションのような韻律教育の重要性が認識されるようになり、さまざまな研究が行われてきた。特に音声習得には母語の影響が強いという点から、学習者に対しては母語別に調査を行い、母語がどのように干渉しているかについて報告したものがほとんどである。しかし、習得に及ぼす要因としては必ずしも母語の影響だけではなく、複雑な要因が絡み合っていることが多い。

本稿では、学習者の使用言語がどのようにアクセントの習得に関与しているのかという点について分析する必要があると考え、まず使用言語自体の特性からどのような聞き取りの問題点が予測できるかを考察する。

2 北京語のアクセント

北京語は声調言語であり、1音節内にピッチの上昇、下降を持つ。1語内に高低を持つ日本語アクセントとは基本的にピッチのかかる単位が異なるが、高低アクセントであることは共通である。

2.1 四声

北京語の基本的なアクセントは4種類ある。これを「四声」という。それぞれの特徴は以下のようなものである。

一声 (陰平声)：最高音のまま持続する高平ら調であり、調値は「55」である。

二声 (陽平声)：中間音から次第に上がって最高音まで到達する中昇り調であり、調値は「35」である。

三声 (上声)：半低音から始まり、最低音まで下がり再び半高音まで上昇させていく低下昇り調で、調値は「214」である。

四声 (去声)：最高音から最低音まで下がる高降り調であり、調値は「51」である。

これらを調値表で表わすと、以下 (図1を参照) のようなものになる。

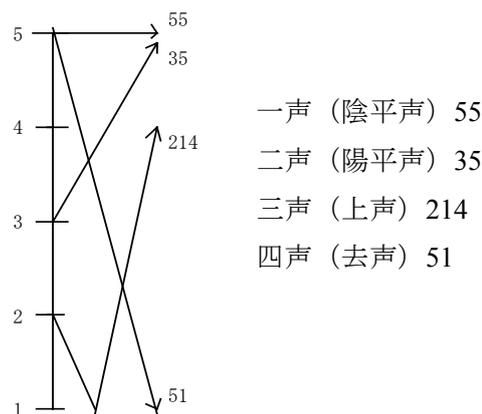


図1 四声の調値表

2.2 轻声

北京語においては「四声」が基本声調であるが、このほかにも単音節に現れることがなく、常に2音節以上の音節に伴って現れる軽くかつ短く添えられた調子で読む「轻声」というものもある。轻声の調値については、前の音節が一声の場合、調値は3となり、二声の場合は2となり、三声の場合は4となり、四声の場合は1となる。轻声は、音節と音節のつながり、または単語や文の構成に本来の音の高さが変化する。

2.3 変調

北京語では、特定のアクセントが連続するときに、規則的に起こる。この音節と音節が連続して発音されるとき声調が変化する現象を「変調」という。北京語における規則的変

調は以下のようなものである。

- (1) 三声のうしろに一声・二声・四声・軽声が続いた場合、三声は「半三声」に変わる。その調値は「21」である。
- (2) 三声のうしろに同じく三声が続いた場合、はじめの三声は「二声」に変わる。
- (3) 「一」・「七」・「八」・「不」のうしろに四声が続いた場合は「二声」に変わる。「一」の場合、一声・二声・三声の前では「四声」に変わる。
- (4) 単語あるいは単語結合の中にある音節が本来の声調を失って、軽声に発音される。例えば名詞あるいは代名詞のあとに使う場合や名詞の重複などのようなものに多く用いられる。

2.4 北京語の音節比率

北京語の常用単語にはどういった特徴があるのかを明らかにするため、『新編國語日報辞典』(2000)(収録語数 50960 語)における単語の音節数比率について調べた。収録語でもっとも語数が多いのは2音節語(38874語)であり、次に4音節語(6598語)、3音節語(5801語)の順に並ぶ。

2.5 北京語の声調分布から見た音節内の高低変化

2~4音節語において、語頭における声調パターンと語末における声調パターンがどのような割合で示されているかについてまとめた。例えば2音節語の語頭における声調パターンを調べる場合、語末の声調を「a」とし、語頭の声調が1声の場合は「1+a」と記す。同様に語末の声調パターンを調べる場合、語頭の声調を「a」とし、語末の声調が一声の場合は「a+1」と記す。また、軽声は「0」と記す。

2.5.1 2音節語

2音節語の声調の組み合わせとしては19組考えられ、語頭の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

4+a	>	2+a	>	1+a	>	3+a
30.66%(11919)		28.60%(11118)		26.29%(10221)		14.45%(5616)

このように、2音節語の語頭では四声がもっとも多く、次に二声、一声、三声に並ぶ。ここで示された声調の特徴を詳しく知るため、それぞれの声調が表す高低変化についてまとめてみた。その結果以下のような順になった。

下降調	>	上昇調	>	平ら調
45.11%(17535)		28.60%(11118)		26.29%(10221)

2音節語の組み合わせパターンとして、語頭に一番多かったのは四声であり、高い音から

低い音へ移る下降調のものである。次に多いのは二声のような低い音から高い音に移る上昇調である。それに続いて多かったのは一声のような同じ高さを保つ高低変化のない平ら調のものである。一番少なかった三声は本来1音節また語末に立つ場合は1度下がってまた上がるといった下降上昇調だが、ここでは語頭にあるため下降調という形をとる。したがって2音節語の語頭は下降調がもっとも多く、半数に近い割合を占め、次に上昇調、平ら調の順に並ぶ。このようなことから、北京語の2音節語の語頭は高い音が立ちやすいといった特性を持っていることがわかった。

また、2音節語の語末の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

a+4	>	a+2	>	a+1	>
38.36% (14911)		24.82% (9649)		18.33% (7124)	
a+3	>	a+0			
16.6%(6452)		1.9%(738)			

語末においても語頭と同様に、四声がもっとも多く、次に二声、一声、三声、そして軽声の順に並ぶ。ここでも示された声調の特徴を詳しく知るため、それぞれの声調が表す高低変化についてまとめる。

下降調	>	上昇調	>	平ら調	>	下降上昇調
40.26%(15649)		24.82%(9649)		18.33%(7124)		16.6%(6452)

2音節語の組み合わせパターンとして、語末も語頭と同様に一番多かったのは四声であり、高い音から低い音へ移る下降調のものである。次に多いのは二声のような低い音から高い音に移る上昇調である。それに続いて多かったのは一声のような同じ高さを保つ高低変化のない平ら調と1度下げてから上がる下降上昇調のものである。一番少なかった軽声は常に前の音節の最終調値より低い調値であるため下降調という形をとる。したがって2音節語の語末は下降調がもっとも多く、全体の40.26%を占め、次に上昇調、平ら調、下降上昇調の順に並ぶ。このようなことから、北京語の2音節語の語末は低い音で終わる特性を持っていることがわかった。

以上のことを踏まえると、北京語の2音節語の特徴として語頭は高い音が立ちやすく、語末は低い音が立ちやすいことが挙げられる。したがって、北京語話者は2音節語の最初を高く認識し、最後に低く認識する高低パターンがもっとも馴染みやすいと考える。

2.5.2 3音節語

3音節語の声調の組み合わせとしては92組考えられ、語頭の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

4+a+b	>	2+a+b	>	1+a+b	>	3+a+b
30.55%(1772)		26.96%(1564)		24.65%(1430)		17.84%(1035)

このように、3音節語の語頭は2音節語と同様に、四声をもっとも多く、次に二声、一声、三声に並ぶ。また、ここでもそれぞれの声調が表す高低変化についてまとめてみた。その結果以下のような順になった。

下降調	>	上昇調	>	平ら調
48.39%(2807)		26.96%(1564)		24.65%(1430)

3音節語も2音節と同じく語頭においては高い音から低い音へ移る下降調のものがもっとも多く、ほぼ半数に近い割合を占めていることがわかった。その次に多いのは低い音から高い音に移る上昇調であり、それに続いて多かったのは一声のような同じ高さを保つ高低変化のない平ら調のものである。このようなことから、北京語の3音節語の語頭も高い音が立ちやすいといった特性を持っていることがわかった。

また、3音節語の語中の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

a+4+b	>	a+2+b	>	a+1+b	>
31.51%(1828)		29.18%(1693)		23.34%(1354)	
a+3+b	>	a+0+b			
14.6%(847)		1.36%(79)			

このように、3音節語における語中の声調パターンは四声をもっとも多く、次に二声、一声、三声、軽声の順に並ぶ。また、それぞれの声調が表す高低変化についてまとめた結果、以下のような順になった。

下降調	>	上昇調	>	平ら調
47.47%(2754)		29.18%(1693)		23.34%(1354)

3音節語の組み合わせパターンとして、語中に一番多かったのは四声であり、ここも高い音から低い音へ移る下降調のものが多い傾向が見られた。それに続き、二声のような上昇調と一声のような平ら調、そして三声のような下降上昇調が並ぶ。最後に一番少ないパターンとして軽声がある。このうち三声は本来、1音節また語末に立つ場合に1度下がって

また上がるといった下降上昇調をとるが、ここでは語中にあるため下降調という形をとる。また軽声も常に前の音節の最終調値より低い調値であるため下降調としてとらえる。したがって3音節語における語末は下降調がもっとも多く、ほぼ全体半分を占め、次に上昇調、平ら調の順に並ぶ。このようなことから、北京語の3音節語の語中は高い音で始まり低い音で終わる特性を持っていることがわかった。

また、3音節語の語末の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

a+b+4	>	a+b+1	>	a+b+2	>
31.65%(1836)		25.44%(1476)		21.13%(1226)	
a+b+3	>	a+b+0			
15.69%(910)		6.09%(353)			

語末においては、四声がもっとも多く、次に二声、一声、三声、そして軽声の順に並ぶ。さらにそれぞれの声調が表す高低変化についてまとめてみると以下のような結果が見られた。

下降調	>	平ら調	>	上昇調	>	下降上昇調
37.73%(2189)		25.44%(1476)		21.13%(1226)		15.69%(910)

3音節語の組み合わせパターンとして、語末2音節語と同様に一番多かったのは四声であり、高い音から低い音へ移る下降調のものである。次に多いのは平ら調をとるものであり、それに続き多かったのは上昇調をとる二声と下降上昇調をとる三声である。一番少なかった軽声を下降調としてとらえたため、3音節語においてもその語末は下降調がもっとも多く、次に平ら調、上昇調、下降上昇調の順に並ぶ。このようなことから、北京語の3音節語の語末も低い音で終わる特性を持っていることがわかった。

以上のことを踏まえて、北京語の3音節語の特徴としては語頭と語中の始まりは高い音が立ちやすく、語末は低い音が立ちやすいことが挙げられる。したがって、北京語話者は3音節語においても語頭と語中を高く認識し、語尾を低く認識するパターンがもっとも馴染みやすいと考える。

2.5.3 4音節語

4音節語の声調の組み合わせとしては288組考えられ、語頭の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

2+a+b+c	>	4+a+b+c	>	1+a+b+c	>	3+a+b+c
31.52%(2080)		28.45%(1877)		27.4%(1808)		12.63%(833)

このように、4音節語の語頭では二声をもっとも多く、次に四声、一声、三声に並ぶ。また、ここでもそれぞれの声調が表す高低変化についてまとめてみた。その結果以下のような順になった。

下降調	>	上昇調	>	平ら調
41.07%(2710)		31.52%(2080)		27.40%(1808)

4音節語の語頭においても高い音から低い音へ移る下降調をもっとも多く、ほぼ半数に近い割合を占めていることがわかった。その次に多いのは低い音から高い音に移る上昇調であり、それに続いて多かったの是一声のような高低変化のない平ら調のものである。このようなことから、北京語の4音節語の語頭でも高い音が立ちやすいといった特性を持っていることがわかった。

また、4音節語の2音節目の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

a+2+b+c	>	a+4+b+c	>	a+1+b+c	>
30.8%(2032)		27.9%(1841)		25.64%(1692)	
a+3+b+c	>	a+0+b+c			
15.03%(992)		0.62%(41)			

このように、4音節語における2音節目の声調パターンは二声をもっとも多く、次に四声、一声、三声、軽声の順に並ぶ。また、それぞれの声調が表す高低変化についてまとめた結果、以下のような順になった。

下降調	>	上昇調	>	平ら調
43.56%(2874)		30.80%(2032)		25.64%(1692)

4音節語の組み合わせパターンとして、2音節目に一番多かったのは二声だったが、次に多い四声と語中に現れる三声と軽声が下降調をとるため、ここでも高い音から低い音へ移る下降調をもっとも多い傾向が見られた。それに続き、上昇調と平ら調が並ぶ。このような

ことから、北京語の4音節語の2音節目は高い音で始まり低い音で終わる特性を持っていることがわかった。

また、4音節語の3音節目の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

a+b+4+c	>	a+b+2+c	>	a+b+1+c	>
34.3%(2263)		30.21%(1993)		22.84%(1507)	
a+b+3+c	>	a+b+0+c			
12.52%(826)		0.14%(9)			

4音節語の3音節目においては、前の二音節と変わって四声をもっとも多く、次に二声、一声、三声、そして軽声の順に並ぶ。さらにそれぞれの声調が表す高低変化についてまとめてみると以下のような結果が見られた。

下降調	>	上昇調	>	平ら調
46.95%(3098)		30.21%(1993)		22.84%(1507)

4音節語の組み合わせパターンとして、3音節目に一番多かったのは四声であり、ここでも語中に現れる三声と軽声が下降調をとるため、高い音から低い音へ移る下降調がほぼ半数を占める傾向が見られた。それに続き、二声のような上昇調と一声のような平ら調が並ぶ。このようなことから、北京語の4音節語の3音節目も高い音で始まり低い音で終わる特性を持っていることがわかった。

また、4音節語の語末の声調分布を調べた結果、以下の順になった。

a+b+c+4	>	a+b+c+2	>	a+b+c+1	>
37.48%(2473)		22.98%(1516)		21.04%(1388)	
a+b+c+3	>	a+b+c+0			
17.46%(1152)		1.05%(69)			

語末においても、四声をもっとも多く、次に二声、一声、三声、そして軽声の順に並ぶ。さらにそれぞれの声調が表す高低変化についてまとめてみると以下のような結果が見られた。

下降調	>	上昇調	>	平ら調	>	下降上昇調
38.53%(2542)		22.98%(1516)		21.04%(1388)		17.46%(1152)

4音節語におけるの組み合わせパターンとして、語末は一番多かったのは四声であり、高い音から低い音へ移る下降調のものである。次に多いのは上昇調、平ら調のものである。また、語末にある三声は下降上昇調をとるためここでも一番少なかった軽声を下降調としてとらえた。そのため、4音節語の語末は下降調がもっとも多く、次に平ら調、上昇調、下降上昇調の順に並ぶ。このようなことから、北京語の4音節語の語末も低い音で終わる特性を持っていることがわかった。

以上のことを踏まえると、北京語の4音節語は各音節下降調をとることが多く、ここも語頭と語中に高い音が立ちやすく、語末は低い音が立ちやすいという特徴が挙げられる。

2.6 北京語の高低配置から見た変動

ここでは語彙の全体的韻律を考察するため音節内の変動ではなく、音節と音節との間の高低変動について見てみる。まず音節の声調を高調、中調、低調のいずれかに置き換える。例えば一声は高平ら調ということから一声のものは高調と、二声は中昇り調ということから中調と、三声は低凹み調ということから低調と、四声は高降り調ということから高調とする。したがって、1音節目が四声の場合でも一声の場合でも高調と示す。また、軽声については前の音節の声調によってその声調が決まる。例えば前の音節が一声の場合は中調、二声と四声の場合は低調、そして三声の場合は高調となる。これまで述べたような分析手法を用いて、北京語の音節と音節の間にどういった高低変動が起きているかについて調べ、それぞれの組み合わせを集計し、変動パターンを以下のような図で示した。○は音節を示し、●は下降が始まる音節を意味する。

2.6.1 2音節語

2音節語における声調の組み合わせパターンは全部で9通りある。しかしここでは音節と音節の間の高低変動を考察するため音節ごと調類に置き換えた。そのため、例えば四声+四声の高降り調+高降り調の場合でも、一声+一声の高平ら調+高平ら調の場合でも「○○」のように示される。したがって、2音節語の変動については以下のような結果が見られる。

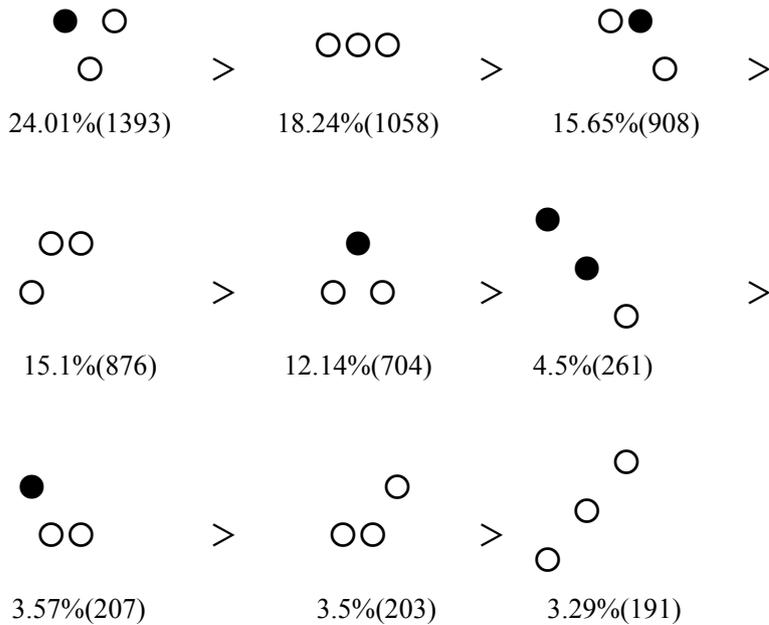
○ ○	>	● ○	>	○ ○
39.41%(15322)		31.86%(12385)		28.73%(11167)

北京語の2音節語における音節と音節の間の変動は、音節と音節の間に変動のないものももっとも多く、次に下降するもの、上昇するものの順に並ぶ。音節と音節の間で下降をと

るものでは1音節目から2音節目に下降する傾向が見られる。

2.6.2 3音節語

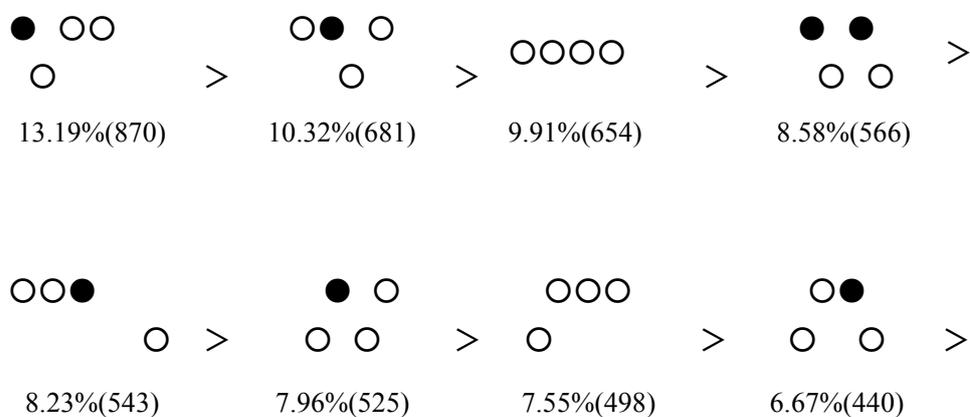
3音節語における声調の組み合わせパターンは全部で27通りある。ここでも音節と音節の間の高低変動を考察するため音節ごと調類に置き換えた。3音節語の変動については以下のような結果が見られる。

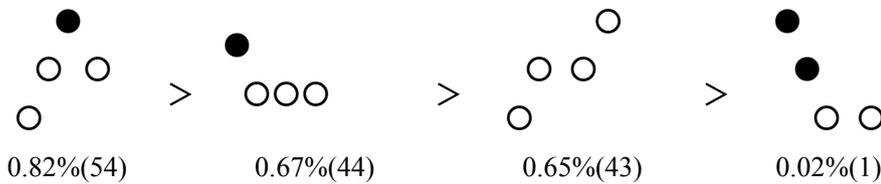
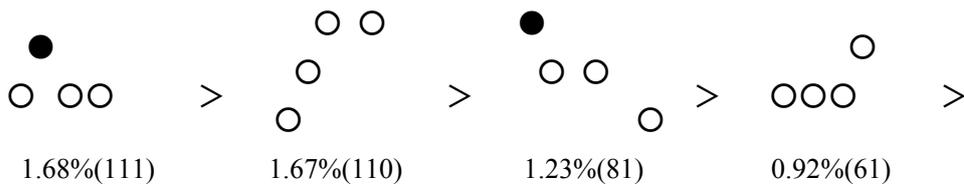
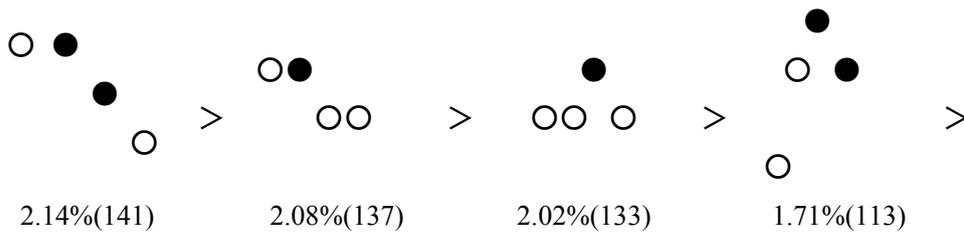
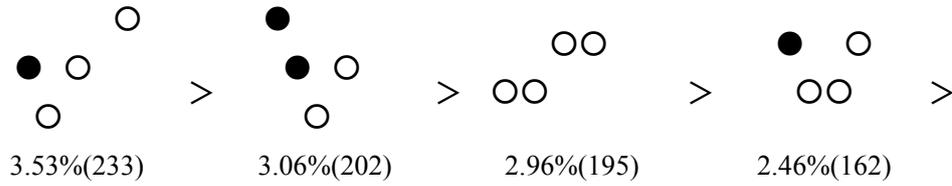


北京語の3音節語における音節と音節の間の変動は、1音節目から2音節目に下降するものよりも2音節目から3音節目に下降するもののほうが多い傾向が見られる。

2.6.3 4音節語

3音節語における声調の組み合わせパターンは全部で81通りある。ここでも音節と音節の間の高低変動を考察するため音節ごと調類に置き換えた。4音節語の変動については以下のような結果が見られる。





北京語の4音節語における音節と音節の間の変動は、3音節語と同様に2音節目から3音節目に下降するものが一番多く、次に1音節目から2音節目に下降するものが多い。それに続き3音節目から4音節目に下降するものが多い傾向が見られる。

3 各特徴から予測するアクセント習得の問題点

3.1 音節内における高低変化

北京語の調値で示された各声調を高・中・低の3段階に置き換え、表1のような結果が出た。

表1 声調の高低変化

	声調	高低変化
1 音節語	1 声	高高
	2 声	中高
	4 声	高低
1 音節語 + 轻声	1 声+轻声	高高中
	2 声+轻声	中高低
	4 声+轻声	高低低
	3 声	低低高
2 音節語	1 声+1 声	高高高高
	1 声+2 声	高高中高
	1 声+4 声	高高高低
	2 声+1 声	中高高高
	2 声+2 声	中高中高
	2 声+4 声	中高高低
	4 声+1 声	高低高高
	4 声+2 声	高低中高
	4 声+4 声	高低高低

表1 からわかるように、音節単位や持続時間を無視して北京語の高低変化のみ見た場合、北京語の高低変化は日本語より多いが、日本語の高低変化と完全に一致するものは頭高型のみである。使用言語においても目標言語においても同じ高低パターンがある場合はその習得が容易と仮に言えるとすれば、日本語の頭高型に対する習得はあまり問題ないと推測される。

また、北京語の声調分布において見られた特徴は、まず音節にかかわらず各音節に立つ声調は下降調が最も多い。このようなことから北京語は語頭に高い音が立ちやすく、語末に低い音が立ちやすい。したがって、頭高型のような語頭に高い音が立つものに対する習得はあまり問題はなく、尾高型のような語末に高い音が立つものに対する習得に問題があることが推測される。さらに、3 音節語や4 音節語の語中も下降調を多くとることから、北京語は語中にも高い音が立ちやすいことが言える。また、北京語は音節数にかかわらず各音節とも下降調をとる傾向が一番多く見られることによって、高さの持続時間が日本語より短いことが言える。したがって、1 語内に高低を持つ日本語との高低単位が異なるため、北京語話者には正確に日本語アクセントの下降の位置が把握できないことが予測される。

3.2 音節外における高低変動

音節と音節の間にどういった高低の変動が起きているかについて調べた結果、2音節語では1音節目から2音節目に下降の起きる傾向が見られた。そのため、2拍語の頭高型に対する習得は比較的容易と推測されるが、3音節語と4音節語では2音節目から3音節目に下降していることがもっとも多いことから、3拍語と4拍語においては中高型に対する習得にあまり問題がないことが推測される。そして2拍目から3拍目にアクセント核があると見なす傾向も予測される。また、音節と音節の間の高低の変動を日本語アクセントのパターンと対照した場合、各アクセント型の正答率は2拍語では頭高型、平板型の順に、3拍語で平板型、中高型、頭高型の順に、4拍語で平板型、3/4 中高型、2/4 中高型、頭高型の順をとることが予想される。

4 おわりに

以上、北京語の特徴及びその特徴から推測できる北京語話者における日本語のアクセント習得の問題点について考えた。その結果、まず1語内に高低を持つ日本語との高低単位が異なるため、北京語話者は正確に下降の位置が把握できないことが推測される。次に、音節にかかわらず、尾高型に対する習得が困難であること、また2拍語の頭高型、3拍語と4拍語の平板型と中高型に対する習得にはあまり問題がないことが推測される。

しかし、このような結果が必ずしも実態と一致するとは限らない。もしここで推測された問題点の実態と一致する場合、使用言語の特性が日本語アクセントの習得に関与していると考えられる。また、一致しない場合は、使用言語の干渉以外の要因が働いていると考える。

参考文献

和文

- 石綿敏雄・高田誠 (1990) 『対照言語学』おうふう。
- 佐藤昭 (1983) 「北京語の二、三の特殊変調について」『中国語学』230: 71-80, 中国語学研究会。
- 重松淳 (1995) 「台湾語話者の日本語アクセント考」『日本語と日本語教育』24: 39-55, 慶応塾大学国際センター。
- 藤堂明保 (1980) 『中国語音韻論 その歴史的研究』光生館。
- 野沢素子 (1973) 「台湾留学生の日本語におけるアクセントの傾向について」『日本研究』3 東京都立大学国語学研究室。
- (1974) 「台湾人留学生の日本語学習者における音声の諸問題」『日本語と日本語教育』3, 慶応塾大学国際センター。
- 潘心瑩 (2003) 「台湾人の日本語アクセント知覚における諸要因—2拍語を中心に—」『筑波応用言語学研究』10: 83-96, 筑波大学人文社会科学研究科 文芸・言語専攻応用言語学領域。
- (2007) 「日本語の3拍語アクセントの聞き取りについて—台湾語母語話者を中心に—」

『世新大學人文社會學報』9: 135-160, 世新大學人文社會學院.

松本丁俊 (1986) 『中国語音声学概論』 白帝社.

望月八十吉 (1974) 『中国語と日本語』 光生館.

楊立明 (1991) 「漢語常用詞声調分布情況的分析」『紀要』43: 56-68, 早稲田大学語学教育研究所.

—— (1993) 「中国語話者の日本語述部の韻律に見られる母語の干渉」『日本語音声と日本語教育』103-122, 文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D1 班平成4年度研究成果報告書.

中文

丁邦新 (1980) 『臺灣語言源流』 學生書局.

郭錦桴 (1993) 『汉语声调语调阐要与探索』 北京语言学院出版社.

魯允中 (1995) 『普通話的轻声和儿化』 商務印書館.

王力 (1972) 『汉语音韵学』 中華書局.

—— (1980) 『音韵学初步』 商務印書館.

謝雲飛 (1977) 『語音學大綱』 學生書局.

參考資料

國語日報出版中心 (2007) 『新編國語日報辭典』 國語日報社.

(潘心瑩 台灣世新大學助理教授)

Chinese Mandarin Native Speakers' Accent-Learning Problems Predicted According to Characteristics of Tones in Mandarin

PAN Hsin-ying

In second language acquisition, mother tongue has most effect upon phonology acquisition. If constituents of phonology are similar to mother tongue, it is easy to acquire the language, while if the constituents differ from mother tongue it is difficult to learn. This research aims to clarify how mother tongue influences accent acquisition in Japanese, so I had clarified the characteristics of mother tongue and held an inquiry into the problems in learning accent. Finally, in the case of that Chinese Mandarin native speakers learn accent of Japanese, the result could be predicted as the following. (1) No matter how many moras, finally accented is hard to learn. (2) There is no problem to learn initially accented 2-mora word, flat 3-mora and 4-mora word, and 2nd mora accented 3-mora and 4-mora word.